

近世大坂画壇における大岡派・吉村派の再考 —— 光明寺資料調査報告を中心に

高杉 志緒（下関短期大学）

大岡春卜（1680～1763）、吉村周山（1700～1773）は「近世大坂画壇」中、市井で活躍した「狩野派」の代表格とされている。同時に春卜や周山は、肥田皓三氏が既に指摘しておられるように、宝暦（1751～1764）を含めた30数年の間、江戸や京都に先駆けて「狩野派の粉本を出版公開し」「以後何度も版を重ねた」版本を遺した絵本史上の中でも特記される絵師である（「絵本」『近世大坂画壇』昭和58年）。

平成に入ってから研究動向として、春卜については朝鮮通信使との関わりが注目されるようになったこと（京都造形芸術大学芸術館『朝鮮通信使と画人・大岡春卜』平成15年、他）。大岡派・吉村派、双方の絵師が僧位・位階官職研究にて散見され、門跡寺院や禁裏御所造営等との関わりが注目されるようになったこと（武田庸二郎他編『近世御用絵師の史的研究』平成20年、他）。以上、二つの動向が挙げられよう。つまり近年、作品研究だけでなく人的交流の面からも両派について幅広く研究が進められるようになった。

大岡派・吉村派の近世大坂画壇における位置づけについて、武田恒夫氏は安永版『難波丸網目』巻4を基に大岡派・吉村派を「大坂画壇の最初の大がかりな流派組織」としておられる（「近世大坂画壇とその時代区分」前掲『近世大坂画壇』）。だが、その全容は未だ解明されていない。

春卜・周山、双方の菩提寺は同じ光明寺（大阪市天王寺区）であることが知られており、脇坂淳氏は過去帳等の資料調査によって大岡家二代（春卜・春川）、吉村家三代（周山・周圭・周南）の没年を確認された（「狩野派系画家」前掲『近世大坂画壇』）。だが、この五者以外の一族に関する調査報告は未だ行われていない。周知の通り、奥絵師となった江戸狩野派は画系と家系の両立を図って発展している。従って、発表者は大坂町狩野の流派形成を探る上で家系調査は必要と考えた。

この度、発表者は大岡家・吉村家双方に関する光明寺資料を調査させて頂く機会を得た。そこで、先述の研究史を踏まえた本発表の目的は、以下の通りである。一、光明寺資料に基づく両派家系図の作成報告。二、光明寺資料調査等に基づく人的交流等の再考。以上二点である。

発表者は、光明寺調査等の一部を既に「大岡春卜と吉村周山関係資料について（上）—光明寺資料と「春卜位記」（大阪歴史博物館蔵）調査報告—」（『混沌』33号、平成21年11月）という題で誌上報告しているが、今回の口頭発表ではその後、光明寺において行った再度の調査に基づいた家系図作成報告、及び大岡春卜・吉村周山による絵本（版本作品）調査等の追加調査を含めた報告・考察を行いたい。